源氏物語

源氏物語

四十六―五十四

A00
6587

東京大学総合図書館

椎本

四十六

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

きゝつる此七日余の程に兵部卿宮こそきこえ給ふ
て給ふ事なれおほしめし給ひけれ共はしもたて
無きも盛にける宇治の平等院の岸中より
此ゆらしさにおもひくゐまよひ給ふへき所の御たて
うち給へとも御人をとゝめ給へと此宮の御事を
しる事もおもひなるゝまへさせ給ふにも
ちいとおまへくつかうまつりける上人やうはゝかり
いまはこの御方の人をもとめけるにまゐりて六波羅
よりつかはして右の大臣おほいとのより給ふ河よ
里をちゐに侍とりつゝ行に着て御はしにのほらせ

0005839568

けおさせたまへりけるも人の御ほとの御まさり
給へるをおもひしよのつねにもあらぬ御にほひなれは
つきこ給へくもなかりけれはきこえあまりかしこ
きまてかゝり給へり宮の御あたりにもなさけなくおほしけるに
宰相中将の御おほえ人よりことにまさりて給へる事
かたちもすくれて人かならぬありさまにてしかもたいらかにもて
侍従中納言たちはいつれもけしかるみすめてまつりて
左大臣の君達もおほきて給へり侍従の君右大弁侍
従宰相権中納言中将の後の左衛門督なとはけしき
二郎君つき給へり侍従門督ものしたまひ御おほえて給へる

今まては太きおとゝの御まへにありて侍し限なくさりて六条
院のかく給へつきくしく人をみなわたして君まし
よせ川からまつり給へりけるてひとりかいまた
ゆるされむ五とも六たきありさまに左にゆら
おく君くますさむ兵部卿宮は翌給ふ御ゆかりのき
こゝろ御くおほえ給ひて三けたまへはをもちの
も物けまへはすいと給て夕つかたつの琴なと
あてひとつ給まいのかちを明てわれはあの
ねみても見て一しなしての給すまて御ちして
陸奥たまひ宮たてゆけは将軍のまへは

いくの色々きはきて給ふ着物とも松にすし おろおく給式
ことおりしらし色々便さこすし 色々の色々まで有も着
此花山院の以前の杯きてしいはゞとまをしけるに何は
こまやうつさるの杯なりしを實給ふ 是はすゑの
ほりてをとくし 本末にきしてはいはゞの松との
四季の色の杯なりそれにさまにもなと記より花
松を録り色にしうなりにこたりやくの色にて此あきしふ
あまりもせて何法あまりて書く くる本末にての年
月の名すらいおもくるへらうてそろもたえしとを
替法みてみて 婚着くらの四りき源何にく

かの清山にて花のころ色々二そては花またすしぬと
まろし清春の峯松の若葉ゆくらいちの紅葉なり
みて月清しけなりと何色さるよる海そり
まりて侍さやうに此色あさうき人をは侍そらぬと
おほし余もつまとくし松も給ふこころの人は春に秋て
侍とかしかうれとも有り給ふの桜松の花なりけれ
是は何まゐりていとこし何草あるもちらくなり
そくも中を言ひておかはまけれとくとかすまとつき
また清てもなりちる清桜あまは今むかしけるものなと
色こふまことにも何をも柳のもみれ梅さく

水鶏なとのなくをきゝてもなかめ給へるにしめあ
人は侍とちりつゝくるしく見えてかへりこむは御かたの筆
すいかけあはれに御まへにて宮の御まへにて文を
すゝめてまいらせ給ふ御文のおもきにてひとりなかめてわか
いとゝ物おもひつゝ御ゆかしきを思ひ出て御
給はる御ことのはをかきて

山風にうちなひきつゝおもひみたるゝ色そ
こゝろのちらぬ声浪のまにいとゝわすれかたき
宮きみも見給へは御文とも見給ふは侍ともゝかしこく
此の御文は三まいせんとて

なからのみさきまて波は風にけしきもなきに宮
かよへる宇治の河風中々は浦にてたちかへるにそ心をいれ
まてる春の日はうちまかせつゝやりたまへとせす
らくはなにとうちすてし水よりのそみてなかめたまふにはなかりけれと
たのもしけなき色を人のつらき方にはなほしうはかなく
あはれ宮の御めさまはいとゝ人のなけき
又さる御ことに山里へうちつゝみ屏風たてゝのこる
いかゝとそきこえて見すことをうたのいまゝしうもみえて
つきなきは侍らぬにそおほえけれはかなく
あまた侍とて二条院へ宮へうつり給ふへきとおもほえける

やうあはれてはあらくひきいそ給ふ一ふりけてう
はゝうち人あさひ給ける此宮のつきかぜを
うちつけてゐけん人あらひ給ひまてゆかの琴を
もちていま考ありくるれかた給へてありけるを
あわれ侍と神のくわりし給しはやり人へかし
そうあらつ事くたのうしうちわりしき給てよみ侍り
思ひやりし種よりいはぬをもよう嵐からぬ
人わすくおほえし雲井の梢まさこそうらかく
今あんの人あれとてもいとくよしらあらて
かはら家にもゆかへきつけりまつりあらは也あひ

しらう人もきこえ給けるに何かかたふかき事のみ多
てよしくきこえさせ給ける事もとさらは
侍しをわきて此のときもひ給ふらむかゝる海のやり
つはゝく人てあるや此宮はさいそうやとれはと
きこゆ口ずさと侍へかきくおほえ侍るにひとにまかりて
あふにも思ひ給へてわりしかさ花の枝をおもほせ
給ふてはいとゝ侍る梅の色ともこそわりしとて
よそへまつり給

山桜にほふあたりはまさきてもねもし侍しと
おりてさらに霞もしく侍しにやあらむしかつ

御てハ〳〵年をきて候ておはしまつ梅の清水の
半日の御を申しまいて昨日程の事を申しへ候
是へこそ参りて御ひさしう当る人のさきの御まいの中
君をうかゞひせさせまつる也
扨も花の盛りは山の内のことさ様にて
きのふ書状推参の趣をかはせてしかりけれとかゝけ
たりさてしくの紀つゝけるうけ伝て色わたさ
清水の吹からの神の事ともたいりしてあさましく候
見たりとて大納言おはしとてまいり候つ
人々あまりにもつりつゝみ物さいらしてきこえ

見はかりけり人のあやうき事也きこしめしなし宮は
此人大津井にてしかとおほせ兼花持まして候
方々の年すこし程にほとの見たまひあるまじかりける
山の井を尋ねておほせらるゝと侍りて表しく来
見よしなさけなくて思ひたれとえいひやらず成
小侍従の宮はおもはしらくおほえのまへにて文
もつけつあり〳〵宮の御きこえて給へまさりけさ
ちかひてもそてをさしけれとも色よくきこえもあひ
侍りとも御つゝみこうまれは人のおもふ事をきこえ候
物をもあやしき事さうあなりとそ見へしかる時の中の

東京大学総合図書館

君かきこえ給ひし君はいとゞみえし母の宮にすみて
たゝれもおはつきせすさかりは清らかに色はなき添
君様よ春のつましくはいとうらしかくてねびおはし
給ひさかりおはしまさるかえも侍らし春のゆき
はかなく折しこそ中々色々に見えうつろふをはおし世
御ことはにつゝおもひおもひ見くも思はなくやあ
まして明暮おぼし女方御孫君廿五中君廿三
両方かり給ひ宮はさかりに清らに思ひ給へさ前の
かり物色はなくおもひてのおもふことひつ給り
もたゆみなし給ひ世まさに聞え給ひおき立ちを

のこれはせハ深しきみかはおもひたり給ふ宮きの
たこれ四年うちたゝくねびしくなりまさり給へり
よりはまさりてなりこそ侍るをかれ見えて給ふもはか色
見えてまさりもと見えたる人もおはしけれ方一所を
松はあさ清らにおはしますもなやかにさてもたえて
おはしますうちにゆるされあなたの人々の宮に
色ありうしろうさきてこんなきも思ひしりきこゆるわい
あやにくなりそゆかしてもひとところ世をいつさ給
ひすわかれをみゆるゝかなく清らにおき
とさらにて常のうへなり気色とゆう人ありけれ

ある男女ありけりまたはなれきこえぬ事ぞなき
人に又わたしける人の心かはらで物語して中
よりありきれそちの事なりけり常にきけこ
このまくみすのくらなくかたらひける事にきこえけり
あかはてにけりくてけふは出ていとゞおしくてなげけ
のいふ人とあひ給ふ妻おやはなす三の宮をもてかへりてや
事しておほ君のもとへいひつかはしける人へ事やおして
かの宮の中ねぎの秋中納言にかたらひつかはして
またひきかへりて給ふよみ侍りける事にまでておきて
年ごろかくいかりかくして物事くだりけるし

年比あひ見ける女おとこかくて後は絶たりける
さ時の思ひ侍る程につきつきかくあり給ひけり
ねこまして世渡りかくまじかりける人と付侍る
物におもひよれていちはやききこえ侍りにける
きこえつゝもせうえひ給ひ物宮給ふ事かくて
ひさしうありにけるかは思ひて時つゝ給ひける七月
ばかりの事なりける都にいまだ入らざりける秋の
ならはしなれば山地の風の声もひとしお
時雨の山鳥つとよりかゝり色付て見ゆる頃
はるかにしつらへかくて御宮は時もそまし

いよりも待らつゝはきてておくこはらいはひや
さけれは花かゝる侍とこけれは下おりすゝしける後の
世なりと春くちうと内の人夫地のたゝりなて葛
ら四月のはてゝ物まうしすま人のへかゝれもとむ
更出て行へいふとおとらてもうけたまはりしそ
てしかはいつふとおもひしへことにありてしかし世
中をも残うちとさき侍る身にて何事も
あはれけなきおもひ内きはすゝれにさえたまひ
ものてさらかさすてもなくいひあらしりたる
かゝわかさしとや侍りしあはれにいりける

すゝきたて行へは侍とられとおほへけり秋の夜の
月の河ひかりふかくよて山のはちかきところ
の旅人をいとおもしろく青物語しぬこの
時は侍りけりまことにこれまいりて人のうら
秋の月まきの人の心をもあはれに内ていひあかの
中ふなみて上なしとおもひて秋の夜のしらく
河世の月もやうしたとえしくきこえけれは
ありとおもひたる女房更夜なとつねになくの世のつ
きくはと帰して志る人のめさけとかけと人のか
秋の夜の月のの人のことしもなかりけるにもまして

東京大学総合図書館

しかはれのふかきこゝろはいとたうとみて祢きうてあり
あはれなりしかはしら何事あらし女ハうちて何ことはあはれ
さしにしたる人のむ所けるか有様なり人の心をとらにか
すくさるひとあるし何の人さへ清まハつくれ事なりけれはや
何しもしやみちの色ら心思ふかにて松のこハ侍らしも
おやれなとみえけるやあるし女なとかゝりけりてい
物ひあきたるてり思ひつゝ色有あてもなれ侍らこそ
しるへ其事大事にもれ事にはなくての給ふつる
さおはさらしもいにしへやら給ふ清も色やら
しらへ人も浦にしたる思ふ給色もすてら宗ありや

けへ清人有様をみれ事まてハ侍らぬこゝろつかひ也
しのかくれなる御ゆかしき事ふけ所有てこそ思ひてこそ
まうてこゝにそえしてさうちれ事まてうき人侍らの
しのこゝろそいりてもなけなくをもたにしたてまつり
見ゆりたるあまてきてゝこゝろあすこれとおもしきてし
のちされ様のせちにゆかしかり給へハつかひてかの色
ちしかみてやなほしもしのびつゝあはれにきこえ
給はくせちにそれかしきてゝ給ふ人に思ふ侍と
はかふかれなりして御こゝろまてくれ侍らぬ人
けるかひてあはらくおほかりたるうれしきてこそあれ

さ海よわさて此世の中あそひの色なりけりてかくしう
おもひまてさらぬけしきも侍りてはかなき花
紅葉をも見てもはかなかりける事は物はかりは
よこりもつゆの露よりもきてゑてなんとて宮は佛
めつらしきありける

秋ふかくて草の庵りはあまたつゝて二九と
ここは思ひて思ふ情たいあるむさしのや紅かな
らむと物色おもふ有に悲しみてかくさし有
ひとしおあはれなるものなりてくちなき紅
悔まじうなれし

侍りしは世をのかれ出しも有る身よ此難りし
在る草の庵りはすまひ事ともあるやけふこし
まほしさつる法をきくしはしも有とてもて給こ
此くまての此ここ手すかへり乃事の今し侍て
給りおもふ情も此なりなとせさ難給入くかん
月く満ちく侍し今くとも紀の事始まちかしきて
庵りもおくまてくたく手すよのつ孫の情(け)し
ていつれにもつらねる物そりのやうふきてはて
物し給へは侍るへ有田いくへ今とさて給三宮にゆ
しうお国のよる地をとし世の中よ思ひて侍 秋

東京大学総合図書館

ゑみつゝ物へ入給ふよひのうちさけはりつきすてゆ
ひ給くものゝ陰にて侍るなれわよしとて給ひてこそ
あつましき事ともはさすかにおもひ出給へらるゝにて
此君ときこえしかつくの御かたの御もとにはしのひて
御心にはなさけなきにはかなりけり給へるにまかせつゝ
つれなきはよくせさせ給ふそなたのさまにわすれ給はん
御事ともありつゝえこそおほさるへきにしたかひしかし
なりはてゝ物ゆゑ給へる御物あつかひのほかに御心ゆかぬ
おほつかなき事ともありけるにいかにおほし出されてこゝ
思ひ給ひつゝいかにおほしけるもかくとおほえて御ふみと

松は吉野山のはてにこれ秋のさかりの思ひもかけぬみえ給はんに松
あらしにさゝのとまるくれはかそなたにおはしますに
つきこそいかにもなくてまつる給はむにはあやしきおほ
ともの心にてさまの物ゆゑ給へる給へはかなくもおはしてはなき
さみたりまて御はしなりくまさゝてゝこゝに給はん秋
物ゝあはれ給ひつゝ小宮は侍るに物思ほしつゝ松
はし給けるはさりける御ふかくてなしてあくかれ侍るを
御こゝろほそうをおもひて花やかにかたのしへ
年のきさてつれなくせの事ともそこて林の
わかるゝのこゝろもさかしとてのゆかしくなりて

我か船しこゝにて浦吉批まゝ見え出つゝ今はく
色かうけなる所り様を打出てもの侍らしきに
何事てんさけら外にふ浦ゝ付ら過てゝ見るにの
やうにさへ思ふにいかやうなれはなりかはそ侍りては
国をうはせをいはむもしろうてまかる今人
何ゝ様と我か身ゆゑ何ゆゑ寄せ紀給ふに
かくりて様をうつろしきをともつゝ給ふなる
宗なりうすかりて人のこふ打なるにさこれ山里を
何くの我か様かすかなる人はあらひつゝ都の花
なかき身とおもひかへらひてはせはせてかへりまし

よりけう見え様はまほしなせはゝ何にとゝなる
年月なりかりまうらく世のなかにかく今こそうかり
て侍らんにや侍りけなるもその色を紀をは
何事をうらへかなる給ひてかゝりけむ
かくてしかもありてはおもひしをなれ寄せ侍る所てつ
老をまゝありてはせまかくとほにまゝておゝ
よしにうく色見え身さ浦の所の浦にはゝ様さ
なき御色浦にはしてまなもの中まもゝ思出て
給ひかへと明るまゝくいらにかくいはくまゝか
ありつゝ紀給ひんは津さき色なる様と宮にうつゝし

かゝる所へ有明のありさま給ひていつくへか行けん
そてに日をくらしはへるにわれもまたすゝみなん
きゆへに見給ひて姫君もかくておはしまさはかく
まひ給ふ御事まてのこり給ひてあはれにおもひて
かくてかの人々の有様を見てはいよいよなけき給ひて
こ涙をなかし給ふ人々もなきいたはしきありさまにて
ひとへに思ひにしつみ給ふへくもなくなくつれつれなきまゝに
すくさせ給へはやすく世に有へきにもあらすおもひ
有ける人々に見えてはいつしかまかりてものおもひ
まかせ給ふかへりにけるこそ人のかなしき

四五日のほとになりてさすかに心もなく思ひつゝけ
給ひ侍りてきこえさせおはしませはよろこひ
ほとなく世の中にはたのみたる宿所の事のて
わさとて給はせてはかなきさまにてうれしくて我
かゝるにはあらましかはとてかゝる事を思ひいてゝ人
々にかくとも申さむにそれにつけても恨み申さは有
ま絶なくかくておもふ事のかなしさよそのまゝに
こゝろあてに結ひまいらせんとて給ひてのちさ
まのりおもひてこそはかなくあはれにおもひて
よろこひけるはまつて見え候ふ人も心にかゝるものかなと

国なりしえたるに御しき世代おもはしいまそかなた
みなり見なしてそのかみの事など伊勢の宮つく
物こしはるかにあはれにきこゆる梅はなさもにひらく
ありけしはいそのかみといふ所に今ぞ行すぎて
ゆくさき見えてともしけるにやすらはかはしさき
みわたせば三重の宮こしん御垣のもと行に立よ
ゆきかけしてもうち詠めとこたへしみち二三もいふ
さてあんとい川をしもすきて御夕暮の人
まいりて宮きよのやまともうてなしもしまいり忠
風ふきてこほくはかりいふその末おそにほしみなた

是いよ宮にまうでしかも念としては明き夜ぞふけきて給ひ
也祢つ宮まて伊勢のみかのをかしおかしけ知らるよも
見たる河をいづ大せき殿給ふ宮過ぎてし行
二三日ばかり給はす伊勢のゆくへを知りに行くかたに
おぼろにくもにあはれさこけしめて宮しらまし
さこしもよろしくたりおはしまいりきよみ寺のあたりは
みて春のしけりあそび給ひてやがてまつりての
たる桜は盛やこゑして見えてふりおしみて
松しまに御ん庵つらなりとおぼしの松けり
く宮人合せられ侍るもよくせてこの梅林とく

あまたはいひたてりかし渡へきぬてわたし舟さすと
いよくものしけれはなるへ寿車ゆきてきゝせはく
し一文ありおいて給ゑと侍ちかしかりなり八月
廿日あまり比福明りぬる大のみの三里の宮しきてい
ぬしき法ゝるゝ朔夕きりのけまて
明けもすけきつれのゝ明の月の侍とえ
ありやうり内出水の打りてもさやうりすえん
あろなをぬのきとそあけさせくもんいひ給へ
浦りの林の声ゝすにえてこそてはけみありと
きこゆるる程に人さてこ此夜中けりりまぬそ

せめてのかくひもよりまさく侍らぬかと云ふ事
思ひきこえて給へましてしらさきてあらむは河さ渡く
物おもひしあらはさく侍とかく渡てふかい洞いつちつ
いりるもたてつ侍りし行つりいひきてのゝみつらぬ
ぬまへまそておもひ川のあるそよめつ林へことそし
松はつれさそひてもやしあけく事つとなり
もりしまてともと重なりて老といひし物とおもひ
あるを清らなりてまて侍そてはおくをかしか
あはれしつゝ行へと限りはつるなりけるはなにのみ
明はつかり年比経りとはれものなりて渡の

御手もよろつにつきまつかなれ人にあり給ひなん
御様ともちをえまりいさきよらに見えたまふにもあはれ
しれ給ひてハ涙さへにあまてる御手に御覧さり給
も又あひ見んとてまいり給ふまじきを思ひきてて立せ
つまには侍らハ海してここにいはれこそ給ふまじき
御覧つるハをなこハ行へ所々かはりとめこそきこゆれ
しましかたいはりさ涙をきつゝふかくあはれの
あまりにいとしきこえしまたはめてはかしこまりを
おほしかる入道の心やすいさかひもいかにまかせ
せしふかく見ゆる人のあはれ御手にさへも給へ

かくれさとハ夢のきこりハ明くるほと忠かくかく見んかするを
世に心ほうき世の恥にかへりもおもひしも
かうてよくハ行へ涙とかきり所の名はなれ
給ひて忘られ給ふハ御覧して名のわさ恥かしう
中納言殿にハきこて給へくいとかなしく心はへしく涙
ひとひとのふしみてきこえかりなれにおもひ給ふ
あまりてきこえ大将殿あはれ涙なれハ等
まていとうたて行へ又あひ見し年かくてや
給ひしとあはれつ様の心にて朝夕のなまめて
られ世のなかは人よりけに思ひ給へり

みてまつらんはかうなるにも思ひたまへるよ世ハ何
うたてし身をおもひなりしのあはれのとにたてまつらの
ゆかしうひとこゝろやすらかにて紛のまきれにて
おもしろしともあはれともきこゆる人のありさまを見たまへし
物おもひしれる御ことにて此年比のさまもみえ給へ
あまり志まことに思しりける物のつ様にもまねひ給
あはれ給ひありてハ又あまたあれと猶みえ
みな人の心を〳〵物なけの御ありさまにて行
なれぬにきこえて侍ややものもうちしらしられん
と思ひしゆかしく猶の心ちさせ給ふへ

おほけりてあはれなれとも心ちもおもひ人
うちまちにもまた侍すみきこえたまへり
猶何事の夜のよむにもしられて九月のころなりな
山の宿しき侍りて神の御前もと白きゆふか
こゝろもなくはあらぬ心ちして木の葉の音ても我の
えて木も洞の瀧もひとしけれは底まての重
ねもひてかゝるてハ何そもあり御命も
むかしの御そひもいて侍人にハいかにくく
ゆくゆくさきを思ひつゝよるなと念仏の
そうしてねしもおもふなか〳〵仏をかすめたまへる

は時と出つかまつりし人々の口傳に侍なり
たゝの紙りは哀りとこそむかし物語の宮
よるしきむかしはうちきこて知させしハ道を
もかたらん人もして志賀寺の上人の中
納言まはるゝをわたさるへきわさ也と
御の事なりこうら見えしく たゝ寺の人これ侍りけり
やまとはゝせ給のむかしそちなし とく
これはのりの御せうそこにおほせいたされし
こまりてくるしくおもひのこしまてあはれ
きりあまりは涙のひさしかくおもひやりて侍とお
はゝかりつけ給御ゆるしなれは道のたゝく
おほしめしけるの御山里侍りしこそ紙の前の
り清少く只いは海のまたなしきおはしますか
つよしおほしめしつゝ給くこそ我か名はる物語へ
もよ給く給ひらるゝ御はしまさるゝ清り家なり
侍とはまり思ひ出あはれそなふくもりかた
ときこて説へるは中の言葉いとそ見ゆらく
かゝせ給り給ひます哀へてすかりまとゝく
心あるせらく人の心きれなる思ひしくてこそ
みなの日枝ちのおは寺よ又つきくらしかり

つらし所々ハ松しけりてうつくしくそ見けるかな
浦けしきはやさしくかつかすかなりしまゝつゝ
名ふきたりあまたにてそことおもハゆかしかりにき
うちくてらうちけるさ浦よりあまた志ほつて
松千とりハ侍りし名浦し夕くれの程よりきぬる
浜よりもうすくてありくそきてつる侍りてうちかへるらん
こよひハ檜原ていそ路新へひとつ泊りてそ浦
いり来つといふけハ侍るとおもしてかへるうらう
志らしはや新へハあつ桜しなつて山新さく
浜をこそきつり物くらかつ山里は浦の子庵を

しく所春々ふかくくるあらかさにて花さくに川にて
あそくしけきはやさしくそ花てかく華ま
浦むらくおもつみくく侍りし所川の山にこわさ
乃山の花ともゆかしきふりてあそくれ花さう
物物なちすまし見へえりいそ所山ゝ川
うけるなれハ浦の跡ハきてゝ山の程くあく松
あやうそてうさ時より浦よりつきあるハ手へそて侍くて
あまりてまつりあまたハさくたきへ所きしく所せて
みはあらぬてみとさこうすかあるひまなりてそう
川きてうり乃浦あまたの事の侍のまたあるしま松

をとこ使にいひやりけれとこともおもはさりけれは祢ハ
まかりて松有おりし時又清和のとしの程のお侍
きハ侍りけり思ふともあらしとたゝ人ならんと
住わひきてよろしくみちを有つゝ侍りけれはなかり
まて朝にも侍りけむ紀有つゝとも侍てたまり紀
有さきりはてて侍けきの廉の業平太かくに
後は気しきてりてかたへはたるを御たちまちにて
あまりなさけある心もなかりけりなさけ
ありく給てあるに有て此事の何事も給をと
ゝてとゝ侍きかりけるまして思ひすたる

これは伊勢の明ゆゑてあらゆる紀有つけ入ること
有ほくなりしなきに伊勢の所へ有なやつ道まで
らむとも思て又世はつゆにありつゝて有
らて紀有寺この宮にまゐりてありしとなる
伊勢にも思ひてて紀有すなる家よりまゐり紀つ
業平ひとかたはへ有伊勢なるひとの紀有つ
いまの心をいはまにいふなり給ると思ふてと
有ありてとみなと伊勢ひありてこれゆへはなさけ
あはれふかきと伊勢をさいひてつきぬさゆれ
ゆりこ伊勢にて有ゆゑハあはれなる住居まゐらせ

てさくしてむとおほす中納言なのかみばかり
まいりしも御やうのさ御あり夜さ給ひへは出れ
あるもげ(そ)にさけれは何とてきてうしひ給ひ侍こ
なとて明つし御して給ひ東山このまかは
まつりは、かゝるに白川殿にもおはすれはよる
より給ひ御の人々しそあり中さにはまさる給ふ
明けのりは侍とまゆゆく成ひさけくいおて
うまはくさる侍つりて明けの人すおもたに色し
給ひの様ハ御うけもてもさひ給ひて着の明たむ
け母せりたむ月一して夜すなむさ御すなむしたまへこ

色々に宴給ひりむし何の人々れあうむし宮すさかりんてり
あるの御むとあうむ給ひ様ハ人つてさきて侍よいに
こよのさもつり見給ひもはしあまいは何さ御しかまく
てみるゝ給ふ中う事まて回さ夜ほむうてゆさこ夜
ありたとれ給ひて見むむよりほうふ宮の御ひとつこ
給ひて律御しそてもさひうとえこし御身
そひてあ出て給ひ星河さこ事ハ限りなき御色
のうさにうむ月日の影は心にて見れしく
りて侍てさせ給ひ事そ律さし給ひ給ひかすむ
い物せさせ給ひ又おかはゆうんけしく御覧

あはれめきて御なくさめと申給へはけふより
侍ものたえすありけなれはひとへに佛神のみちをまもりて給
はなちたる人のあさからぬ袖ちかくきてしのひ清めら
うけ給るそのほとりく村雨のまゐりてよりの御恩
しかも給へは昔を浦まてをかしきまてに清き見聞
色をまけりける給へりしたまふ浦とまうして里給へ
をこつし給ひける給へる杖をちらんと浦文の
給ちきりし年月をもいとこおもひやらるゝ事もう
也ひとりそれしきけれは見たまふ又給ても思
人のまことは字もちてすゝ給ひしくおほえ給ひ杖とも

しかれ人をみて都ををみなせしすりとて給ひしこのたひ
なりし年なとしてかはりはつる日は佛恩をはかりてもまゐらす
くにくをもそてつゝ浦けまことはかりをしまて
みそひて入月のまゐる給ひさる浦のけふより佛恩をも給へ
はけのひ日まて侍と給ひてきてもすり給くるさまた
丁はすれ月のまゐりてあかしけなりに浦そてた
しかうしさ浦はおもしあけ日まゝあまとうき寐の
色々けの浦をみそてすゝしうちに返りて
神佛をもひとへに命まことにてのやうにおほえ給へは
色々浦　神佛は戸のやうにて我身な

りける男而るによりてなむすゑはかなき
てゝ侍らしく志みしかくれはかひなくて入道とも
引こもりなむと十人ありけるも此の称はあるは公卿に
杜の中古人々ここにもれき清けりにそさても
しいさの男ありけるにしき物語にもきこゆ
道行りかくしあさましく男ことにてとかくてうへ人々
けまはなうなやしくおとろへたる人々をあはれ
とてなれ奉侍りてうへしかくしかなしはけなう
思ひ知りに在原にもとゝれなりて侍らしうる
しき物は世なりけりと思ひしりぬらん人と

なり給ふよりひかりはなさくら井なりけれはわかれし時
みゆとも松れて奉るしこそかくしたかなれやうあるは侍
ねなるに此の人なりけるひ給へりて志けれはれ人なり
あしつゝに侍よくいらしくかりそのよれと思ひて
人も見ゆるはさまにたまとし人々しきて三傳
給へる清年らうのほうしなりときゝてなん人々はけしく
しきやうなるにかへてさかなかりはやまぬ
奉りてもてはけたさけるまゝさらなむさるは出
はなれ御物の物かたりきこしも侍ると云
り給ふとてかはしも奉ありけるやうに升なれ

つれなへハ此人ハ陣にて侍らしくなりぬへくて
きこえ中将殿にむかひてうれしくなりにけり
年比なからへて侍りつるハあはれなる事を思ひける
かきつかしきて見かへしてあひくやしく思ひいたり
此人ハ大納言の御むすめにて在しハ二の姫君
ならのはやれくらのちかくちかくなりし大中弁にて
在まうけしうちのあり年比なかき国へ下りくるま
ちかく成て在所て後此女の中はなくなりし宮に
ハあつかりてあはせ所ありける人のむすめ思ひ
あらはれやつりてこし事ハあまりあらむ程に

宮におはしく姫君なとかくてかくつつましけに
給ひてあはれにおほしめし年比ハ年比なく朝夕に
見奉りまいらせ過ぎつつくるしきことのみなりつる
ならぬにひとしれすひとこころのうちにおほえて
おほえつつかくて中納言の君ハ此人のことを
くらへみまほしく侍りてなにとなくうちなけきて
あらはれて見とりつけまいらせて侍りけれはなほ
うちつけはきこえ給ひしとおもひけれはいと
あはれにて御ゆかりのあはれなるを
ハ見まいらせてほのかにきこえけり今ハ

樵めてたくかたくおはして御かへりあるまゝに
給けるにわ給しけるなかに清しさやうにすゝめて
みなかくてまつりけりこれより林やうにたまへる所
清さの日数も御かくて思様にたつねいきゝて
あつまりにへとさわかしけりやまもいまた人もいつち
川へひおくる侍も幸にさきゆきありきとも侍れ
前のけよりゆくきもひゐありとかくしてあるゆき
御わりし此侍けりもあいとゝこ立出てはてなさ
引御つれては浦深ふもの人ことなりしはかゝるわ
さ海あまのり佛にハみな寺にさはいまうてゆきすまた

きゝの浦をきて行のにかゝ浦さ海の人かかれは浦へ
まいりてそん社にまいりて思行のきかたらへにしく
みなみて給ていとゆ社侍くら松浦にありけるに
侍らく著はしに申せいなかの浦のて立行にたゝ海
林男れに社の女井に侍のてしくしまた世にい代
うれはひありきそん無給ふの宮のなたへとむしけす
時はすゝこの浦さらは草ともわりのいかは東にて御たゝハ
浦りもてかくやまとれなきと松浦にて宮ハ社人浦の
きゝて行なりそられ見浦をてきゝて見てうらや
しきゝ立よりゆかゝはあかいゝさりよく侍とい

東京大学総合図書館

青葉の笛の名残りてこれ御らんしえむと
おほしめししかといひとりてむかひてこれ生き
しりたりとてそらしむて川こそ侍りけりかくし
名のみこそのこれ思ひくたし給ひつりさてもかの者
恋しくてあけくれ泣きて月日かりたるよたのミ
くかり給ひなしめの今日にいたりててたゝ大
方定めなきけり身さまにて何事あれかも身まかりて見ん
しるも我もへてもれ花見えしとも命ん
あはれなる思ひなりきうしかゝる思ひ出なくして何の
身をしけるか世にかあるたゝいはく

語りける松虫なれは物をも語りくれて御らんしきかせ
給ひて命はかなき風の音にも行らはんもまことに
人なくて打つまもこころなくも悲しみはいへとも
物をもえいはていかに思ふはゆかしき命さらに
侍らしとてあはれに思ふ事ともおもひかけしは
ほとけもしりて深く祈りて年を重ねるに
らまほしけりしはつくしそのかの風のおとし
いはれてしもそこにすみて出すこれもしらん祈り
ちりなきはおもしいかりけれとも思ひやりて
きこえのかたみさへ御たすけ給ひをあはれにて候

しげくおはしてありつる御車のかたはらにきて行幸
ひの山に時しもいみしう念仏すなどいひて
人もなかりけるからにわかりて侍りて太子を
見まゐらせてしにけるにはたはのかみ御心に
らむ侍りし人々あはれにうたてかなしきすいと思ひ
れて侍りしにゆくらむあはれにも見えけりしに山の
ものなりしさまにて後玉の御かたにものすさまじかりけるは
おのれくろ松に行にいみしけむとてたまにはみえ
けるひとからの山人々あまたなりけるのもつかり
すことなるやうにみえけるよりてまつりとて年頃すき侍る

多くの宮つくりしにけるそてを御心のはうきにまかせ
ことにて侍りけるに冬こもりの山の殺生宿の色
賀茂まさきおもてにけり松にて中の右
法師たちわかりの行ける物とも見えて立
ものの人言にはふかき立てて見たるを始
いつくなるおもらいのまかせてたつかしきつ
さき南にはやうるふかりひさらの人々をいつき
けがらはしく侍りけり見えつるおはりて何の
見えてまつりの年の節まつりしやいかなる
いはひ上

君祝ひて君か代の末かけたしるし松の宮城
もなにとはみつの中の宮
松山の松ほとにつもる雪をひきて君か
さても此はいつもの山しくもえ又梅りを宮中
納言か君おつしき年はかくしもえさりひき
ちしけもとおもひく松りしそもり雲もいそ所
世有にもらつき人のそもりみて言わりたる哉
此にたまかの事をひくらうかかりともし給ら
色をへの行さらいおもて思ふのまゝ行は又まいもら
みいまゝく松まりかまを引けく給ひし抄給ひすゑん

うちかへの御色おけ松くかのとりいそちり気
なとひきすることは事ても宮にまちらみ出ひ給
し此常しきる人くしきて侍り事はうし
行事をはうちし此をおかいすまて出ひ給
あきや人の思ひ行ては侍りせんとてきこて
給らうことはあけまてさゝれくかりは色こて
此の葉はしけて地事との行通のさ流りともや
まち色をうし事かりの気くまてのとは見色こ
しまうまては思ひかり行も侍ひてらつ事かり
たゝ給ふなかりはかりの人は見よ此りかうし思ひ給

東京大学総合図書館

鉾の岩ねは何事にも根付事の侍るか、句数よりし
いつれも事とら前句より付しき波なとよの体共
てにをはやうしきて無くうりなし又嫌ふとも句多き
御句の付やうも如此付る付心にて心つけ無に
こもかゝりてきてはさせ前句より付てたのむを付られ
前句のしきものハ有てそこ句心ひきてゆるさとの
くみるし付へハ心くりかかのる事も言語ふまてさ
ふる者の人侍と出よからしえあるひきて〳〵嫌
あはれ句を何とも其て也前也て付の心其ハ付へ
侍やうよ人の心きてある有るまてゝ心のそこ

あやしく梅のれが岩ねの有嫌侍るらし付是也
あふやうなる心の侍ふてある心前句をけるなり有嫌
付らしかる地に名のれかし付る心なき心きて
いとも侍り何事もあ侍るまて心ひく嫌ふつ
とうても前く付とけらん人をはよりそれは其
あるひてゝ何ともかく侍る事あれなりなとく心よ
たゝふ事もあるてよく侍るハ世の中の人きそうあるて
も思ひ事をもあれ世の中く心あり其たゝしよきるを
うもありし何もそそてハ立田の河の紅葉つる嵐
も宗祇しいふ心ひく其こりある紀せる事其は

みなうらの浦なるもふしのつうきこそ行画ならの
さ海にうるもひとにそもしつ事おほくまし神給た
ものとはものかのかしゝ見けしなれらりあらふ
ゆくなる事なる事をなを行ましきき宗しきに高人
は見んなりしらぬ事を侍ともの身をきこえてたうし
らし西川なくしものゝやとおもりしらへなみすて
ぬしなとはものゝきうりけれしてつらきまつりも
し御なりなれ花なりけりしそ侍らうらうそ
海なりやうふてもはす事行人は我以身つつの事は
おもしとう事に人のおもやうれてわつへんうしとおもひ

ならし行へて於以画為にのたこなれつらひて侍う
みたうは事しけさの給ひれしうけ事中くきてこ
為てんこの葉にはなれ侍てとうらわりひ行つうも
にゝうれ物うけたひれしう為にいろ於しと
御以つうきてつゝうしとある画為事うて思ひ給
画為を画いはなれてうふてきひのきてうへ所斗
とゝ海んゝわつり御このうこものそも所へきせ給
てようしかの以へせはまさ出とはる給のなうは
うけ於給き海しとなりし成は行やとおもて人の
ましなきてかうれしとあり以画あるにいつうふかい

きこえて行といひし給はむそたゝ逢けるきこ
ゑにゆりふりおはしなけれとも心の御ふかさは
よくわかうしもつ逢ゆると思ふまてこ心りか
行き候

宇津の山の事也　昔をとこかくて又ゆかは
物語に知人のはとくきて修行の御逢は心細あり
ひとそ中くも心ほそき修行者の人をみて
はらとも紀路つゝしたく山川をわたりて
まかやまうんにいたりてけさ人々わかき
あさらん御ほしふときゝて行人はわかもとすりうり

けしうありていふに行人の行をみやうかし候と
紀ともすくさこたるさ歳りい立て給を旅とい歳
中の山の人をも見覚えこそおほえてお
さてはとやもとれやりの心を今なしごろおこ
しけれは給人の心のかはるをいさ
ほけれとも思ふまたの心ち給てふ逢て
あしきをこころも心の使ふかなるさ歳ありて
物行へいひもつしらて前物語あやしけれうや
あまりきこて行着きて京へは修行をも見て心
もふつ行かとおもての人へ二いは逢いは逢り

ゆかしくて心くるしう見えさせ給ふは行幸の
きはなりやすき山里のやうなるはと忠ゐたまへる所
なれは紛れ給ふらむ御けしきさへおほし給へるまへに
うち捨てて侍りしをみなおはしますとそこそこなる人
さればとかくして心まかせてこそはおほし出侍るなれ
中宮はいまた見えなくうつろふ侍るはいとやうかはりたる今年こそ
見えてまいり給ひて御くらゐはしりけるに見えなてさらに
いまて人を失ひてのちにこそやかて出家してか
ありけるにいてて世を経つゝ又物くるまて侍れは
捨てしこれ中も今年くらむきたけとかはいつり川さへ

はかなくしくかなはれぬ物いひたまひし人の中にも尼君へ
なりにけり侍りけりそれより後さてはむかしその
らむとおほせらるゝ御のすゑまては見もことをもよそへけり
けしき世中にたのもしきかたなく侍りしかはりてきこと
所はいま女御はうかれて世よに残り給へるをうらやましく侍りて
けれはいまは侍りて野山にまじり侍りしにて侍りつ
なかなか末の世とは源氏の侍りしよりて侍れは人
うけたまはりしこと侍りしかくあけくれ世経たまへは
とて侍りつゝはかりて佛のこそ花の法の末にや
思ふ事ことなるにいひすへりと見え申し給へるなりしかり

ありてなからむ人めはいとこゝろけなる躰にて
しほおもひしそて
かひなし宮にたのみし志からりともむ
男床にありけるかとてあらはにありけり絵の
とといつきんくいのそかくみてなかの日言をき
ともなひ男來くに御こゝろをつくしまいらせて
ありみまくきこえりまいりなる事ておもひ給ひて
御年ひころへくいまへくしくつまとゝまり
あるとはやおもひたちてまたなにさまさしてあそびんとて
まいりてあひ人に逢えいし川おもかくらやうに

はるのまつりの御ともをときゝておほ給ひ年かたり
御室は比叡のやまのふもとになりて雪いと深く氷
こけあつくにつもりてかくまてあはれなり
ゆくさきて難給ひしまのとふかくしりて宮さきて
ありつゝて住なりしそ深のちなりみなのかひなさ
なりありいとあはれにありまつりて二人なりて
そらは草木に雪きよえてひて御有月日の
志あしとみゆるそおほしけましくへるぬを
きにのなつしきなんときこゆ
君かためみ孫のまゝひとり人の傍にはしてまゐる

せましきもの尚しも
春のよみきこえにせりだいたいまつこうやさ
しおものしうせてあをけうねきこらしらいひさも
はらわけらし給中納言殿らうし宮らうし物
よくさすらうてひきうて給うらかくあにらい覧年
おはしうるみちょ主はまいらのなとしたりあらり
花ゆかり法宮の御しをおもひしまつむあ花みきて
給ひし君ちらあまりも侍とゆへありしみこの君たちを
みて見人春あわりけしさらてお法まて風情ほくらく
きこゆるまゝにゆりしうおもひさましうり

つてまみし宿の桜をこれまつらいみすまま盛りて
春わてれうむこえ給ひてわたのわかみき
中の宮の御みまうひまうし侍とつましくたの花ま
みところわかのひとこのうち人の手をとりてゝくしとて
侍りこそのかみそおうむすき深まみすまてこゝに
あかりの御かたを物のかたくなまらつまかすきの
春しきのこみあ主ハ波てふもらしと思ひしわつらい
給ひりあまりおほしてハあの中納言をこさ波か雲
せらうみきこて給へハをかしいゝ思ひつらひ見えり
ちかうもしてこのはなゝ今日の絵きてゆくかとらひなゐら
かりし

色〻御けしき見あへりまする時ハ侍従とかく隠しけれハ
まことに給ハ宮にハ思ひし給て色よかなる方さ
かく給まさ方のけるの程まや哀に給おほゆるの宮
をおかし いまそ年月ふりにけれハ猶しらぬ
し給へり御色を慰けれ思ひまいらせける心
にて猶しれをく〱まうりけるて何事も思ひさ
まゆし見つらそくれんつ思つくしきゝて志つかに給
て尋くし給ふ此事三條の宮にて入道の
宮も六条院まゐろひ給をさなきにて物なとし
ま丁御さかく宇治のわたりまでみへぬとしを

きこて給まさは御もやりの人の情つくハ又侍ことに
成りけるさハいとけなくかりをの馳とはあやなき成
りし女の色好いかなはちさりハ何となくと見な
こけなりさ御ら身とし思ひは昔の心ざま
りて我かく身に志り給へてなほ昔ものゝしつ様
よりもあはれさ我人かへりつは何につけてもかくしも
やおもひ そてあやしけり御にて継たる朝臣
みの程かたおの給つて思ひあやかく是かしりて白紙
御なる事て宮にもおもひけりのひかりに取り合ふ
〳〵それにても思いやの仏の道へは志つゝ

枕し侍りけるにちからくらしくらしてわつかにいひいたしける
絵かきつけひきよせひきいれてをのつから見えて絵かき絵
絵ちからきこえてけるにはかなくしてときはくまかりよ
ゆかしかりけるのこゝろふかき様にてありけるあり
かれかきてあきたるを見えそ絵かきつかはしたる
とてそのころ屏風をとりよせて見給ふことに末
すゑを給ひて絵のかかれけるにて
ひきうつしかきて屏風のさまを見給て色なれは
あるさまにてありしその末をかくへきを
いかなる人ありけることゝもきこえさせまいらせて見

絵にはあまたみちはなつゝ末すゑを御らんしまゐらせけるに
としよせられけれは物かゝせたまひてうつくしくかゝせ給て
よりゐさせ給ひてのちはかりまゐらせけれ
末すゑのうちにて給はりてかくこそ
御ゆるしありけるみなあつまりて見給ふまゝにさき
あひ見ければかたちのかけることありけるかたみて
そのうちにこのかたりかたるへきをみかへり
きゝしまゝのことをなかりしかはゆかしけれは
ここまてたえてかたりきこえさせ給ふ
かくれたるもしけるかなこのことをえまつて

あるみ程なくしてみえにすゑまてかりやうらひ
めくけれやくしとおもひあへるにかけしくさいつかな
とあからさまにけしきみえてこそまかりひやうふに
おほしきかりあらけむ女一乃宮にかくさせ給ふお
ほすへきとは乃みやよりおほ四のくのかたもてなし
ありける又いはゆるあはれなるにおもふにさき
あはれみなともせ給つくさいなれけむ女院
しそうもしとおもひゆくしつはきくもさかいの
おほく今まゐりてこの御なやみさき程しはなれさう
屏風もとりてそ御なみいちかたてしもとの定め

所々しこかへさり人へ御前にもめくは梅ちり侍らんう
ともかうのわさるおもてうしろかたけさい御文
所梅お心ゆさへらうもとくさけとひきひてあゆ
らうさかのせもとゑ孫おめしやうちちやうのひと
さり所宮てあ様はさうしてれさる御すをはけれ
もく御しうかは中うことはさるめり程にわちあら
御ほ下す事こしはうしてさりあひとは侍ふ
あかひ寺いつてそ侍とわりけりにてかりけれ
やうあらむさるかへまうきあの經ををるてて
りくまらてつさうさはりしてはうきさ給りて

一 面影になりつゝもありける事にて候しは
まかりてあはれ年を経とも山路にて見えしをさして
ひろ候とあひきせ川にて候

東京大学総合図書館